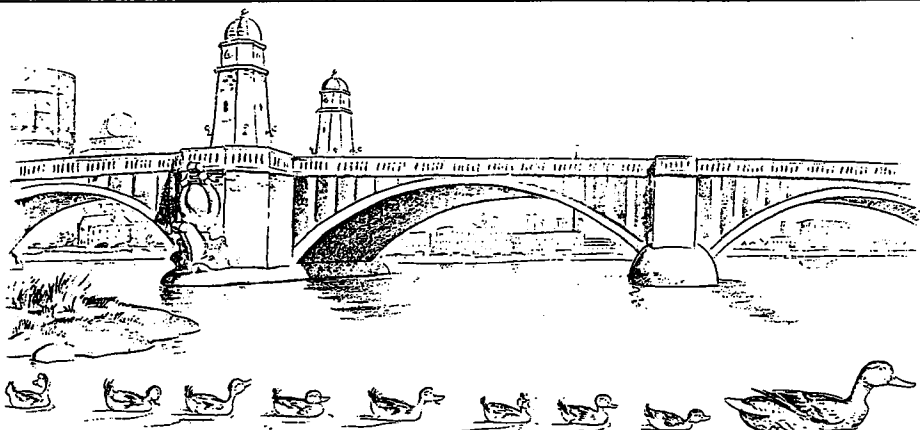


図書館たより

号数 第 82 号
発行日 昭和63年 9月30日
編集 島根県立図書館
発行 松江市内中原町52
TEL(0852) 22-5725
印刷 島根印刷株式会社



ロバート・マックロスキー作「かもさんおとおり」より

親子読書に思う

島根県教育委員会社会教育課長 生田昌子

先頃開かれた松江地区の教育懇話会の席上で、木次町の藤井教育長さんから、大変良い話をうかがった。

木次町では、これまで中学生になると図書館の貸出しが、急激に減少するのが常であったのに、今年は減少しない。原因を調べてみると、木次町で親子読書が始められたのが、今年中学生になった子供たちが幼稚園の頃であり、長い年月本に親しむという体験が、たくましく現われた結果のようである。

しかし、この親子読書の活動も、住民の間に、理解されるまでには、色々曲折もあったようである。

若い母親が、家事もそこそこにして子供に本を読み聞かせることは、年配の人たちには、かならずしも好ましいものとは映らなかったようであるが、今は住民の間にすっかり定着し、本を読み聞かせる人も母親ばかりでなく、時には父親に、また時には祖父母へと広がりを持ってきたということであった。

読み聞かせは、子供たちを想像の世界に遊ばせながら、豊かな情操を育むかけがえのないものであるが、もっと大切なことは、親と子が、大人と子供が一つの読物に同時にひたりながら、最も人間らしい心と心が結び合うひとときを持つことが、できることである。そしてこのようにして結ばれた心の絆は、

子供の成長過程に大きな影響を与えるとともに、読書の習慣を楽しいものとして、身につけさせるであろう。

木次町と同じ頃親子読書を始められた仁摩町でも地域にしっかりと活動が根付き、昨年度からは、子供読書の活動がスタートとしている。仁摩町の藤間社会教育指導員さんは、親子読書で育った子供たちは、本好きな子供が多い。子供読書により異年齢の子供たちに仲間意識ができたこと。親子共通の話題のできたことなど、成果をあげておられる。(青少年育成シリーズ第5巻から)

今、教育は、これまでの学校中心の教育から、家庭、学校、地域が連携をとりながら学習をすすめる生涯学習の時代を迎えた。科学技術のめざましい進展や長寿社会の到来は、人々に生涯にわたって学習することを求めている。

生涯学習の方法は、目的により様々な方法が考えられるが、何より身近な方法が読書である。幼い頃に育まれた読書の芽は、生涯学習時代に大きく花開くであろう。

親子読書や子供読書の活動の輪が、さらに県下に広がるよう関係者の皆様の一層の御努力を期待する。

農村モデル大東町立図書館

大原郡大東町大東1,191-1
TEL (08544) 3-2150

大東町は出雲地区のほぼ中央にあり、周囲を山々に囲まれています。総面積152km²、人口約1万7千人の町であります。図書館は、町市街地の中心部にあり、諸公庁、学校に囲まれ環境に恵まれたところにあります。当館は文部省の農村モデル図書館として昭和41年9月開館しました。建物面積382m²、鉄骨一部二階建ですが、閲覧室はせまく、夏休み中は子供たちが独占し、大変混雑をきたす状態です。

現在蔵書冊数2万3千冊で町民一人当たり2冊の目標に達するまでには今少し年月を要しますが、町予算の増額を期待しています。貸出冊数は2万4千冊で僅かながら年々増加しています。特に今年は中学生の利用者がふえました。これも54年度より取りこんできた親子読書の成果がようやく現われてきたのではないかとひそかに喜びをかみしめているところです。

活動状況

● 今一番力を入れているのは子供読書会です。昭和59年度より3年間県のモデル指定を受け順調にスタートをきり今年で5年目、17グループの子供読書会を12名の指導員により運営しています。

実施にあたっては毎月1回指導員研修会をもっていますが、このことが指導員の自信にもつながり楽しい読書会になっています。指導員が常に心掛けていることは、「急がない、あせらない。一人一人に声かけをする。子供の反応をあたたくとらえてやる。子どもの心をゆさぶる。」など学校では得られない楽しい雰囲気ややるよう努力しています。

又子供読書会も親子読書と同じで継続実施することに意義があるので、今後は指導員の後継者育成に力を入れていきたいと考えています。

もう一つ大切なことは町民への啓発です。町青少年健全育成会議総会の折には毎年子供読書会について事例発表を行い、地域や学校、公民館、PTAの理解と協力をお願いしております。

● 子供文庫については子供読書会活動をしている地域の27家庭に設置し、親子で本のお世話をしています。中でも熱心なお母さんは新しい本を

配本する度に子供たちに呼びかけ、借りに来た子に一人ずつ声をかけてやるので温かいふれあいができ、子供も楽しみに本を借りにくるようになったと話されました。配本も隔月に一日がかりで実施しますが、一人でも多くの子供が読書の喜びを味わってくれることを祈りながら駆け回っています。

● 本町は面積広大で遠方からの図書館利用ができないので、町内17か所に配本所を設置し、身近なところで読書に親しみ、心豊かな家族ぐるみの読書環境をつくり出すことを願っています。配本は各月に限り公用車で図書運搬を行っています。

● 成人読書会は昭和53年に1グループ誕生しましたが10年後の現在6グループとなりました。メンバーは婦人が殆んどを占めていますが、やはり図書館からの声かけ運動により読書意欲が高まったようです。今年は町の助成により合同研修会をもつことが出来ました。会員相互の交流を深め、読書と人生について感銘深く学習することが出来たことは大きな収穫でありました。今後も年間計画に基づき学習を行う予定です。

成人読書会合同研修会



● お話し会は昭和57年から幼稚園、小学校低学年を対象に実施していますが、子供たちは喜々として図書館へやってくるようになり、又幼児は親と共にくるので職員とも親しくなり図書利用者も増加してきました。今後魅力ある図書館づくりのため、資料を充実させることと、専任職員(司書)の確保などが大きな課題となっています。

「ゆめの子文庫」オープン

大田市波根町
ゆめの子文庫母の会 代表者 勝部良子

63年3月31日、小さな小さな「ゆめの子文庫」がオープンしました。当日県立図書館の飯塚先生にお越し頂き、ストーリーテリングとエプロンシアターで素晴らしい花を飾って下さいました。また意東公民館力作のブラック紙芝居もお借りして上映しました。集まった子どもたちは目をきらきらと輝かせて聞いていました。

以来半年が過ぎようとしています。かすかではありますが、毎週土曜午後と日曜午後の各2時間の開館日はこの地域の子供達にとって楽しい本との出会いの場になりつつある様です。一度に2冊、期間は2週間という規則をもうけています。本の貸し出しカードに記入するのはもちろん、色別の読書カードを渡し、書名、借りた日、返却予定日を記入してもらい返却の折には行末にシールを貼ることにしています。これが自分の記録として残される事にもなります。

当番は13名の会員が輪番で当たっていますが、もう立派に手伝いの出来る小3の女の子もいます。

催し物としては5月22日、終日激しい雨の中、わざわざ松江より「布の絵本の会」の皆様が大きな「赤オニさん」のプレゼントを持って、合せてパネルシアター、指人形劇等を演じて下さって、子どもたちはとても愉快な一時を過ごしました。

夏休みの8月20日には「お話とマジックショー」を西部読書普及センター所長の木佐先生をお招きして催し、幼児を含めて31名の集りとなり、その晩は家で話題になったりするほど人気を得たようです。

こうして、地域の子供達もだんだんとこの文庫を身近に感じてくれるようになり嬉しい限りです。

中秋の名月には、お団子を供えて会員によるお月さまに関する本読みなどの楽しいひとときを計画しています。

さて文庫設立に関しては、建物はもとより書架、蔵書の確保等と有り余る資金で始めたものではありませんからみな事ではありませんでした。当地は

島根県に於ける親子読書発祥の地であり、市の中心部の唯一の公共図書館まで遠く、書店は皆無という環境にあります。出来るだけ幼い時に良書に出会わせて本好きな子どもに育て、豊かな感性の持ち主になってほしいとの願いは本の不足に嘆いた15年前の体験から、常時私の脳裡から離れない事でもあったのです。「継続は力なり」、「偶然は用意の出来た人間しか助けない」との言葉を実感しています。



「失礼だけでも、お金もないのに他人の為に図書館など建てて、本を貸し、金儲けをするんですか。」一年

前に町民より直接聞いた言葉です。その夜、涙は留ることなく伝わりました。しかし15年間の人々との暖かい交流が、行政を動かすバネともなりました。文庫は善意の宝石箱と私は秘かに思っています。

ところで、会員13名の無理のないボランティア精神に支えられ、「ゆめの子文庫」の名の如く頑張っ て行きたいと思っています。メンバー自身の研鑽の一つとして、近く出雲市の二つの図書館も訪ねることにしています。また、郷土にまつわる伝説の紙芝居作り、自然観察の旅、かるた会等を今年度の企画としています。顔馴染みになった保育園児が町中で出会うと大きな声で挨拶してくれます。こうした事も一つの地域の連帯意識の高揚になり、青少年健全育成にも一役買う事となり、明るい町が生まれることと思うのです。おわりになりましたが、今日まで文庫建設に御支援、御協力下さいました方々に深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしく御指導の程をお願い申し上げます。

わたしたちの読書会が、戸数260戸、人口800人ほどの山村に、長い間の夢がかなって誕生したのは、はっきりしませんが、もう、5・6年前のことだと思います。いまは、40～70代に入った女性ばかり6人で月1回続けてきました。

読書会に参加したことのある方なら、どなたも感じておられる、読書会ならではのよろこびを、わが会のみなさんもこもごも語っておられます。

73歳のAさんが語っておられる思いが、全員のみなさんの声を代表しているのではないのでしょうか。

○自分の好みだけでなく、幅広く多数の本にふれることができてよかった。

○多忙な生活の中でも、読もうという意欲がわく。

○読後の感想をのべあうことも楽しい。

○悪いことなし 等々。

みなさんに感銘を受けた本を伺ってみました。

○死への準備日記（千葉敦子著）

がんと真向いながらも、自分を甘やかさず、仕事に情熱を燃やす著者の精神力に感動した。

○生にえの島（菅野綾子著）

戦争をしらない私にとって戦争というものの本当の姿を知る大切な一冊となりました。真の平和とは何か？しみじみと考えさせられています。

○太陽の匂い（棕鳩十著）

児童文学に注ぐ著者の情熱に感動する「人間の心

より知識が、人間の美しさよりも権力が優先される時代には、児童文学は軽視されがちである」などの一節、全く同感である。

○人生は60過ぎが面白い（石垣綾子著）

平易な文章の中に、人間の生き方について学ぶことが多く、停滞後退しがちな老人にこれから生きるエネルギーを与えてくれたと思う…略… 等々、つきることがありません。

私が仕事としている建築の歴史からみますと、図書館は戦後、各公共機関の中でももっとも利用者の立場で、市民がより活用しやすく改革された分野となっていますが、（これも図書館に関わられたすべての方々の努力のためだと思います）毎回本を送っていただいた時、また送り返すとき、居ながらにして本を選び、しかも無料で手にできるなんてなんとしあわせなことだろうとかみしめています。

長い歴史の中で蓄積されてきた、世界中の宝物をせめて利用することで、今後の図書館の発展にも寄与したい、体の続く限り続けたいと願っております。

読書会グループ紹介
私達のグループと読んだ本
水上読書会

グループ名 「水上読書会」（大田市）

会員数 6名

代表者 三室聡子

NEWS

☆昭和63年度(前期)市町村読書普及研修会の開催（8月22日・26日）

子供の読書をすすめるための研修会を8月22日に県立図書館で、8月26日には西部読書普及センターで、松江市立城北公民館から狩野信館長を招いて開催した。今回は、趣向を変え子供読書会運営の際手だてとなるレクリエーションの方法を中心に講義と実習をいただいた。参加者、東部(60人)、西部(76人)。午前 講義「子供会の運営とレクリエーション」
午後 実習「子どもと遊ぶ」
研修会のおよび(東部会場)



☆読書週間(10月27日～11月9日)に関する行事のあんない

○昭和63年度読書普及研修講座の開催

1. 演題 「子どもの心に学ぶ」

2. 講師 鹿島和夫先生

3. 会場・日時 島根県立図書館 学習室

昭和63年11月13日(日)

10:00～12:00

○読書体験記の募集

親子読書、子供読書、成人読書、文庫活動等の実践を400字詰原稿用紙3～4枚にまとめ10月31日までに松江市内中原町52番地県立図書館内島根県読書推進運動協議会あてお送りください。

○昭和63年度読書推進運動功労者の表彰

多年にわたり読書推進運動のために尽くし、顕著な功績があつた者(2団体、1個人)を市町村教育委員会からの推せんにより読書週間にちなみ表彰します。